

紫式部の自我について

はじめ

博士後期一年 孫鳳霞

偶然な縁で紫式部の『源氏物語』に興味を持つようになり、勉強したのであるが、しかし、この大作を読めば読むほど、その理解に困惑を感じ、この作品を書いた人間はどのような人なのかということを知らないと、正しい理解にはどうも近づけないだろうと思うようになった。なぜなら、この作品の内容においては、一貫した哲学を取った世界観とか、歴史観とか、或は人間という存在のあの側面の真理を表現したというより、感性的な人生観照のようなものが書かれているように感じられてならなかったからである。藤井貞和氏が言われた通り、「これは、担い手の作家が、個人の生に密着した、優れた人生観照家であることと、どこかで関係しているのではないか」(注1、a)という感想そのものであった。ところが、この作品は千年前に完成されたものだけに、千年前の社会体制や風土人情及び価値観などに根ざしての作者の「人生観照」である故、作者の生の基盤となっているこの集団的な生活スタイルと、作者の個人的精神世界とはどう関わりあっていたかについて考察しなければ、豊かな理解ができないし、又、作品の光と影とが交錯している中で作者の創作真意はどこにあるか、その解答を掴むことできないであろうと思われる。それに、文学作品は一枚の漫画にしても結局、作者の価値観となんらかの関わりを持ち、紆余曲折に表現されているだろうが、蹈晦せずに率直な表現方法が用いられているだろうが、作者の生の表出であり、作品の主題、思想は作者の精神世界や価値観を逸することがないという文学原理には古今問わず変わりがないのだから、作者についての考察が必至の要請となろう。ところが、千年前の作者や作品についての文献がとても少ないだけに、この方面の研究がすでに長い歴史を持っているにも拘らず、『源氏物語』とその作者の紫式部との関係や、作家論としての式部像については、学者の間で見解がいまだにまちまちであるし、そして不明瞭なことが多くて、また戸惑いを感じさせるものもまだまだあるようであるが、いったい、これらの問題は歴史の貴重な文化財である作品の読み方だけでなく、その時代の文化へのより正しい理解に接近するためにも、人間の精神的発達の実を発見するためにも、弛まぬ研究を続ける必要がある。この認識に基づいてこのつたない文章で私なりの紫式部論を試みてみたいと思う。

自分の考察方法を説明する前に、先ず私の知っている範囲でこの分野にかんしての幾つかの代表的な意見を概要的に述べておく必要があると思う。現時点で見れば、一つには、作品への理解はこの虚構以外の作家の個人的な経験や時代背景などの歴史的事実の調査の上で行うべきだという、所謂八伝記的作家論Vのような意見がある。例えば、高橋和夫氏が「執筆との関係」(注1b)のなかでこれに近い見解を次のように述べられている。

執筆との関係事実を作者の生涯の生活環境と結合してみても、執筆時期、その順序の想定をすることが、源氏物語の外的事実の究明だとすれば、創作の動機・構想・思想などは、作家の内面の成熟過程の問題である。これらに迫るには、紫式部をめぐる家系・時代状況・経験的諸事実を明らかにし、ついで、読書歴、生活状態、思想、心情の告白などから総合的に見てゆかねばならない。

これは戦後一時あった、社会階級や古代末期貴族世界の諸矛盾という視点からの論議とはまた違うような気がするが、史実からの出発という点においては類似しているとも思われる。ここでは両者の間の違いをこれ以上追究する必要はないと思う。もう一つは、文芸現象の作品本文を文芸研究の唯一の対象とする、△作者△作品論の解体△多義的な読み△(注1c)という見解である。それはつまり、作品を一つの自律的な世界としてその方法や、構造、文体などを考えるということである。秋山虔氏が渡辺実氏との「対談」(注1d)のなかで次のように述べられている。

しかし読むほうは、作者を読むのではないので、表現体としての作品の世界を読んでいくのでしょうか。表現世界に共鳴したり同化したりすればいいのであって、なにも作者の存在に向かって感動するのではないのでしょうか。

これは物語を自律的な世界として見るべきだという考え方を最も代表的に言明されていたものだと考えよう。私の考えでは、一つの文学作品を一つの独自の世界とみて作者から切り離して享受することは事実として勿論できることである、しかし前述したように、一つの、はっきりとした哲学的思想的な理念によって統合され完成された作品ではないこの作品を、時代の隔たりもあって、作品だけに局限して読むことには疑問視せざるをえない。作品とその時代への理解により大きいスペースを与えるために、その作者である紫式部のことをまず理解せねばならないと私は痛感している。まして、この研究において先達たちがそれぞれの角度から努力された結果、成立しな文学表現なり、多くのことが明らかになってきたようである。お陰で私のような後学は多大な恩恵を受けている。とはいっても、どうして紫式部がこれだけの巨篇を書かなければならなかったのか、住む部屋の簾から外の世界に殆ど足を運ばなかった一人の女性はどこからこれだけのパワーが生まれてきたのか、といった疑問について、紫式部の内的心的な営み、発達過程から考察するような研究は必ずしも深く進んでいないように思われる。私が言う内的心的な営みとは、伊藤博文氏が指摘されたような「平安朝盛期に生きた一人の女が巨大な虚構の世界の構築に心血を注がざるをえなかった魂」であり、「現実とは異次元の壮麗な小宇宙の創出に生を転封することを必至の要請とした心的機制のありよう」(注2)である。周知のようにこの問題に最も早く注目された伊藤氏が『源氏物語の原点』(注2)という著作によってこのような素案を行われたが、しかし、私には、△精神の基層△父と娘△というフロイト心理学理論に基づいた論説には大きな疑問を感じてならない。というのは、フロイト理論の不完全さが今世紀の初めにすでにユングによって鋭く指摘されたし、それ以来専門の心理学者たちが更に広い視点からより深く人間の本質の多様性を論破しているからである。ある心理学者の言葉に、紫式部のことを考える時の私は深く考えさせられた。ここではこれから展開していく自分の考えをより明確にさせるために、ぜひ引用しておきたい。それはドイツの哲学者でもあるエーリッヒ・ノイマンが『芸術と創造的無意識』(注3)の中で論じている。

深層心理学的研究のここ四十年の成果の一つは、ユングによる集合的人間的無意識の発見に基づく、超個人的心理学の創始にある。この基本的な新しい立場に立つてはじめて、創造的過程ないし創造的人間の理解ができるようになった。たとえば精神分析のようなものでさえ、家庭環境とか成育歴とかの個人データによる諸条件に還元し、創造的過程を腫瘍のように、病んだ土台から出てきたでき物として「説明する」。こういう誤解は、集合的無意識が発見され、子ども時代とそれとの絡まりが理解されるまでほとんど避けることができなかった。

今までの紫式部論の中にはこのような「誤解」がなかったであろうか、どうして同時代の女性みたいに多くの男性関係がなかったようなことを掴んで、式部に「同性愛」傾向があったとかを引き出そうとしなければならぬのか。式部の独特の精神構造の形成に関しては、外的な要素ばかりを取り上げてよいであろうか。人間本来持っている意識の二面性——「帰属類群」の意識と「個別的な存在」としての主体性——についての認識が著しく進歩してきた(注4)今日では、私たちはこれらの問題に対して、女としての式部でなく、すべての根源である人間という原点に戻って、考えてもよいではないか。以上のような認識に基づいて、『源氏物語』や『紫式部日記』の作者としての紫式部について、その精神世界の深層——個人的な主体性の構造を、幾つかの視点から考察し、今までの自分の疑問と心得た見解を述べ、式部の実像に近づきたいと思う。

一 紫式部と同性

紫式部という人物を理解するには、その歌集の『紫式部集』と『紫式部日記』があり、断片的ながら彼女の人生における経歴や出来事など、さまざまな情報を残してくれた。これらの文章を通じて式部の人生体験の事実を解明できるのはわずかであるかもしれないが、しかし、その精神的体験を知るのには十分であると私は思う。史実という、ついに物的なものばかり注目しがちであるが、精神的な情報も決して無視できない史実であることを強調しておきたい。式部集とその日記には作者の虚像が混じっている可能性はあり得るけれど、その精神構造の真実なる骨格が明らかに表現されていたことは否めないであろう。△身の憂き△から△心の憂き△に至り、外的な△憂き世△への洞察から自身の△憂き心△への沈潜と省察に回帰するという特徴は誰にでも明白のことである。

しかし、この表象を結論として扱ってはならない。が今まで自分の読んだ文章の中で、これが殆ど結論的に取り扱われているように思われる。ところが、これは式部の内なる精神世界の底にあるものが表面に現れた時の姿にすぎない。式部の精神世界の深層に視線を移して、何故こういう様相を呈しているのかを深く追究しないと、結局△謎の憂い△とも言いいたような憂いに更けている△病的な憂い△と言われた式部像しか得られない現状になるのである(注5a)。しかも現時点の史料と今までの関係する分野の知識と研究生かを利用して、この△謎の憂い△を解くことが不可能でもないであろう。

無論、『紫式部集』や『紫式部日記』を読んでみると、私も同じようにまず注意を引かれたのは式部の暗い△憂い△への嘆きであった。そこで、式部は果たして生まれつきにこの救いようのない暗さの持ち主なのかと疑問に思っているところ、少女時代の明るくて爽やかな式部がかつて存在していたということに、清水好子氏(注6)の私的気がついた。ではなぜ成人後、特に結婚後の式部は憂鬱の中に沈んでいくばかりとなったのかを考えずにはいられなくなった。こうして読んでいくうちに△生き甲斐△への欲求は式部の凡て憂いの根本的な原因ではないかと思われてきた。これからは式部の△生き甲斐△の欲求△と△憂き心△の△関係△の精神的深層構造を考えてみた。

紫式部の歌や日記には内容的にまず看過できない特徴が二点あるように思う。ひとつは、内容的に同性に関してのものは相当の分量を占めていることである。これはなぜなのかを考える時、まず最初からの彼女の生い立ちを想起し、その精神世界の成長が人生の早期

にいかなる条件にあったかを考慮に入れる必要がある。

通説によれば、紫式部は数え年三、四才の時に生母がなくなつたらしい。このことが彼女の性格形成、生き方及び文学創作において物理的にも心理的にも重大な意味を持っているにもかかわらず、従来の論議の中で軽く看過された虞がある。式部自身の詩文のなかにそれに触れたものがないせいか、母親の喪失という事実が式部の深層心理にどんなものをもたらしたかについてあまり言及されていないようである。

今井源衛氏の意見（注7）によれば、父親の為時が式部の母が死んだあと、また他の女性と結婚したが、為時は新しい妻を自邸に迎え取った様子がなく、式部ら同母兄弟三人は、母のいない家庭のに漢学者の父と乳母や女房の手で育てられたのである。小さいときから利口な式部は寂しいこともあったようであるが、周りに大事にかしずかれて成長したようである。又、後藤祥子先生が『紫式部集冒頭歌群の配列』（注5b）という論文の一節に次のようなことを述べている。

人の遠き所へいく、母に代わりて

人となる程は命ぞ惜しかりし今日は別れぞかなしかりける

為頼集にみえるこの歌は長徳二年（九九六年）初夏、為時の越前赴任の際の饒別歌とされ、歌の相手は、息子の為時というよりは祖母がその成長を見守った孫娘式部であり、為頼集にほかに、式部と従姉妹関係にあるらしき人への離別歌をのせるが、そこでは特に母の代作のようなことはしていないから、式部の可愛がられ方、あるいは祖母との密着の仕方には格別のものがあつたとみてもいいかもしれない。

人間がそもそも、さまざまの原因で隔代の母親に対する可愛がりぶりは特別のものようである、まして母を失った孫のこととなると、なおさらのことであろう。したがって、この母親の喪失の故に、人格形成期の最初から、式部は自分の身の上の欠如による自己哀れみ一すなわち自己愛Vが後の強い個性的な特徴をなして現れるが、こうして周りの可愛いがりに加わって、自己存在感Vとともに根強く形成され、そして彼女の全生涯を一貫したと思われるであろう。後の式部の生き方も詩文もこのことを余すところなく物語つたし、これはユングの心理学から見ると、母なる自然の平衡法則―補償法則によるものであつて、人間がなにかの喪失に会う時と、無意識の内でそれを補おうという働きが一層活発になる（注3）という理になつてゐるのである。つまり実際の親が欠けたことで無意識の中で親が理想化され、意識の深層に帰せられるが、一方、理想化された愛への欠如感是自己愛の増大によって埋め合わせられるのである。これは無意識の自己補足機制という人間の心的仕組みだと考えられているのである。式部の場合、これだけでなく、周りに大事にされることで、この自己愛Vの上に更に自己存在感Vを重ね、鮮やかな個性的な性格として表出されてきたようである。なぜなら、愛情の欠けることのない子どもは自分自身を価値ある存在と認める内的な感覚が生じてくるし、確かな自己意識も発達することができると、ユング心理学理論によつて論証されていた（注4）。また、後の『源氏物語』にあんなに多くの母親喪失の設定はこの無意識の存在の裏付けだとかんがえてもよいではないか。それに天才的な素質の、感性豊かな繊細な式部には、生母の喪失に対する気持ち、史料として見ることでできないが、だからといって、心の中で軽く処理されたとは考えられないのである。

これらのことから分析して見れば、式部の人生の最初から、後の精神構成の基本を規定する要素としての自己愛Vと自己存在意識Vが形作られたと考えられよう。ただし、その負の面―憐憫や対外的には傷つけられる恐怖による回避の傾向―は、現実の悩みからまだ縁遠い少女時代には、特に聡明だった分もプラスして、周りに愛されて、母性愛には欠けなかったもので、無意識の中に消えていったのだと思われる。かえって、成長期の最初に一つの資質として精神構成にできたこのような自己意識は年の若さや周りの環境の有利さなどの優越的条件のもとで、正の面―自我肯定や対外的に自己主張をしようという傾向―は大胆不敵な姿を取って現れてきて、明るく颯爽とした式部を見せてくれたのである。それは式部集の最初の歌から垣間見ることが出来るわけである。ここで、とりあえず挙げておくことにする。

四番 おぼつかなそれかあらめか明け暮れの空おぼれする朝顔の花

この歌に見えるように、娘である自分の方から男に歌合戦を挑みかかる大胆さが、式部の相手に対する自己存在意識をよく物語ってくれた。この他にまだあるが、例えば

十四番 祓戸の神のかざりの御幣にうたてもまがふ耳はさみかな

陰陽師の役目を代わつて行う法師を皮肉つた歌である。後に夫の宣孝と交わした歌などには、精神的な成熟に伴つて、深みが増していくけれど、この精神構造が一向に変わっていない。むしろより克明に表れている。例えば、二十八・三十七番の歌と五十一、六十九、八十二番の歌などに見られるように、相手が「四方」や「八十の湊」に恋を寄せているとか、「誰が里の春のたよりに」「浮き手寄りける」「あだ波」だとか、「入る方はさやかなりける月」などという表現の中に自己愛と自己存在感の強い意識が躍動しているし、又、自分のことを、「露の分きける身」だとか、枯れ草の中の「ささがに」とか言いながら、「薄き」「移る」「あだ波」の心の相手に向かつて、自分の気持ちは何時とけるかは分らないと、絶交したつかまわないと、「思ひぐまなき桜」より「近まざりす」「桃の花」の方がよい、など等明言している強い姿勢にも、単なる「心が強い」とか「しぶとい性根」というより、この自己愛と自己存在意識に由来するものと理解した方が公正ではないか。天才的な式部のこの自我存在感と、成熟してくるにつれて強まった内なるアイデンティティが、その時代の一夫多妻社会体制に、規制された女性の立場に相容れないのだとしか言いようがない。この超時代のアイデンティティこそ式部を苦悩に陥れた根源ではないかと思われる。したがって、こういう精神構造と精神的営み自体は周りに受け入れられなくても、けつして歪んだものでもなければ、問題性格Vでもない。むしろ天才的な資質の式部にとって、その全人格の要素からすると当然のことである。彼女の詩文や物語の具体的な内容も屢々とても明るい式部と、その健全な優れた感性を見せてくれることで、証明してくれた。その実生活を記録した日記の中で精神的な愛いを忘れた瞬間にこのような顔を覗き出す場面が所々に見られる。こよなく敬愛していた中宮彰子に仕えている時、

うき世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまあるべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとへなくよろづ忘らるる。また、なにかの「めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけて」、彼女自身も「思ふことの少しもなめなる身ならましかば、

すぎずしくももてなしかやぎて、常なき世をもすぐしてまし」などと自ら述べている文章を見ると、それは単なる道長・家への稱賛ではなく、人間としての心情の真実の自然な吐露であると思えるべきであろう。それで本人がこういう自分にはつと気がついた時、八愛身Vの自分を「あやし」く思い、なおさら気持ちがあふがってくるくらいなのである。これも道理のことである。なにせ人間が自分の内面性についてはつきりと意識されたのは中世になってからのことである（注4）。私には、式部の精神世界の中に強い「自我愛」——自我価値の自信によって、明るさ、というより健全さを最後までずっと保つことができたと推論したい。式部の最晩年の作で中宮彰子の病氣平癒祈願のために清水寺に行った時、伊勢大輔と交わしたものとされる歌（補遺3）は、このような式部をある意味で見せてくれた。

三番 心ざし君にかかるともし火の同じ光にあふがうれしさ

自信のある人間はその自信の客観性はともかくとして、心理的にはある程度の安定感と明るさを持つことが可能だと思う。したがって、式部の生涯は不幸に違いないが、だからといって、彼女の歌や日記に見えるような、どうしようもない八暗さVが、彼女の精神世界の全容だというように捉え方は間違っているであろう。しかも憂鬱になつていく時でさえ、精神的な調整をはかろうとする努力とそれだけの能力も、その自己愛と自己存在意識が性格という次元に局限して云々すべきではないことを証明している。無論、病的なものとして扱うのも妥当ではないと思う。これについて後章で違う側面からより詳しく検討するつもりであるから、ここではこれくらいにしておく。ただ、式部の宣孝の死などを哀悼する歌には、個人的な感情の表現は和泉式部のような激しさがないことと、日記の中に絶えず訴えられた八憂き心Vの対象の曖昧さが、違う次元から考えるべきだとつけ加えておきたい。それでは、精神発達の早期に自我意識が確かに根を下ろした式部はどうして後日の暗い憂いに耽っていった、人の前に出る時、わざと「人にかうおいらけものと見落とされにける」とは思ひはべれど、ただこれぞわが心とならひもてなしかば有様」というほどに、自分の真実を踏晦するにいたったのか、これからは式部のこの基本的な精神構造がどのようにその生きた時代の現実の中に組み込まれたか、そして如何なる様相になって表れていたのかについて、さらに追究して考えなければならぬ。

第二節

前節の冒頭にすでに触れたように、式部の歌も日記も女友達との交流がかなりの量を占めていた。従来、この同性への多大な関心が色んな論議を呼んだ問題であるが、いったい同性の存在は式部の精神世界にどう関わっていたのであろうか。私にはこの同性の友人を通じて式部は、同じ女としての自身の人生を論じたのであろう——その時代の女性誰もが免れぬ悲しい八宿世Vである。式部の人生の中を一期一会にして、通過したこの女性たちが式部の精神世界に、殆どが悲しみの多い姿でしか映らなかった。このことは彼女たちと交わされた歌殆ど全部がその証となる。式部はこういう社会一般の現実はどうすることもできないと、逃避できない女の運命だといやおうなしに見せつけられ、思い知らされたと推察できよう。しかも八友人たちVという普遍的な現実によって、式部はもはや八個人Vを越えた、すべての女性の悲運に対する一つの人生観に至り、その延長線として後の物語の創作にまで及ぼしたと思われよう。この認識は結婚前にすでに式部の心にあつたと考えられる。とばいもの、未婚の傍観的な立場にいる時とこの身で自ら経験する時とは

また違うことは言うまでもない。清水好子氏が『紫式部』（注6）という著の中に次のように指摘されている。

しかし、際立った特色は、紫式部集において、娘時代がある意味を持った、他とは明らかに区切らるべき一時期として意識されていたことである。彼女はそれを結婚前期の恋愛時代として捉えていなかった。たしかに自分の身の上が決まらぬ時期ではあるけれども、和泉式部や赤染衛門が恋人との贈答歌をその時代の記念にしたのに対し、紫式部はそれよりもはるかに多感で多事な青春時代として位置付けている。

私も同感であるが、しかし、清水氏の文章では必ずしもその理由を明白に説明されなかったようである。私の考えではこの区切りは上述したように、他の女性の体験からある程度悲観的な人生観が形作られたものの、結婚前の式部には希望があつたというのが働いていたのではないかと思う。自己愛と自信が強いほど最初は夢と希望も大きかったであろう。これがまた、その時点では友人の悲しい現実とかけ離れて、その如何ともなしに難い運命を、離れたところで見守っているしか、それ以上の投入ができないわけである。それが結婚してからの現実、その人生の夢——自己存在価値の実現の可能性——を残酷にも砕いてしまった時、他人の人生を悲しむのではなく、自分のへうつし身Vを悲しむ立場になった時、歌の切実な感じは違うものとなる。当然なことながら、少女時代の

十三番 時鳥声待つ程は片岡の森のしづくに立ちや濡れまし

のような年の若さが想像される甘い哀愁が歌えなくなるであろう。このように紫式部に自分の良き少女時代がひとしお意識されたことは、現実の女の運命に直面していい時だけに、人生に少なからぬ夢と希望を抱いた記憶の表れであろう。

この時期のものと見られる歌は、意識的に詩集の最初に配列されていることは右のように理解してもよいかと思う。それは具体的に、せ見ると、一、二、三、六、七、八、九、十、十一、十二、十五、十七、十八、十九の十四首であり、いずれも哀愁あるにはあるが、せば詰まった緊張感がないと言えよう。終始、式部自身とのある種の距離感が感じられる。中には傍観者の冷たさを帯びた眼差しと口調さえ感じられるところがある。まず一番歌を挙げてみたい。

早うより童友達なりし人に、年ごろ経て行きあひたるが、ほのかにて、七月十日のはど、月にきほひて帰りにければ

めぐりあひて見しやそれとも分ぬ間に雲がくれにし夜半の月かな

この歌の解釈について、まだ議論すべき点があるようであるが、先ず「ほのかにて」と「めぐりあひ」というところで理解に悩まされていた。清水氏の解釈（注6）によれば、「ほのかにて」とは時間の短さを示す言葉ではなく、視覚に関わるものだから、式部の家に訪ねてきた女友と話している時間あまりにも短くて、長年別れて面変わりした友人の顔もそれと見定められなかったのに、友人がもう帰ってしまったのだ。といわれているが、だとすれば、友人が暗くなつてから意図的に訪問してきたということになるので、詞書きの「行きあふ」とは食い違いが出てくる。『古語大辞典』（小学館）や『古語辞典』（旺文社）や『随筆治などの編』などの辞書も調べて見たが、どの辞書にも「行きあふ」の意味は「行って偶然に出会う、出くわす」という解釈しかない。もう一つ、わざわざ訪ねてきた友との久しぶりの対面だから、時間がどんなに短かったにしても、その顔さえ見定められなかったというまではどうも

無理が感じられる。そしていくらか古代のことといえども、中流の家庭に十分な灯りがあつたであろうから、何が理由に「ほのかにて」という表現になつたのであろうか。小さいことのようにだが式部の当時の立場と心象を考える時に重要な手がかりである。

一方、『紫式部集全歌評釈』（注10）に解釈されたように、「ほのかにて」は視覚的な不明瞭さと、時間的な短さとの両者を兼ねただけで、詞書きについての説明が無かつたし、「久しぶりに逢つて、まだあなたに会えたとは思ひつきり分らない、そんな僅かの間に、あなたはもう私のもとから去つていき、まるで夜半の月が見えたかと思うとすぐに雲に隠れてしまったように、はかない思いがした。」ということだと、「行きあひたる」ことは偶然だったという意味合いが薄い。

詩作も文学創作の一つであるから、無論、誇張や虚構などの手法が使われてもおかしくないが、しかし、和歌を理解する時、それについている詞書きの真実性は無視できない大事なもののようである。この「めぐりあひ」は時間的にごく短かつたのと、視覚的にはごく不明瞭だったということが共通の理解で否めない。とすれば、私はやはり後藤先生の意見（注5b）に説得力を感じている。それはつまり、式部の従姉妹（女友の範囲内に帰す）が地方下りなどの際に、親に随つて祖母や伯父のもとを訪れてきた時、式部も一族の長老である祖母の邸の一角にいたため、この歌の成立背景となつたという説である。このような理解だと歌の解釈もすつきりしてくるし、前文ですでに言及したように、祖母に特別寵愛された式部が祖母の側に泊まつたりすることも容易に想像されることである。こんな思いもかけなかつた奇遇だったからこそ、式部の心に与えた衝撃が激かつたし、また時間的にも視覚的にも「ほのかにて」しかできなかったのであらう。幼い時の友人が久しぶりにそこに突然現れ、そしてすぐ消えた故に、多感な式部には夢幻のようで感無量であつた。その上、この束の間の出会いの目付をも、それは十月なのか七月なのかはともかくとして、書き留めずにはいられなかつたぐらい強い印象を作者に与えたと思つてもよいであらう。

要するに、一番歌には時間的に、また視覚的に「ほのかにて」という感覚的なことには止まらず、作者の空間的な距離感も心理的な距離感も明らかである。これは重要なことだと思いたい。史実を考証する時、物理的なものはもちろん、思想的なものも、史実に近づくのには、十分役立ってくれることを忘れてはならないことをあらためて強調したい。ことに古典文学の場合には、史実の考証が難しいからこそ、より正確に古人の精神世界を理解するために、このような精神的な手がかりを大切に扱わなければならない。この考え方に基づいて、一番歌に注目して頂きたいのは、この歌の上語は友人であるということである。この歌の根底には、二人の出会いのほかなさを嘆くよりも、女友の人生にあるどうすることもできない「何か」を沈痛な気持ちで見守っている、というずっと深い思い——その時代を背景とする人生観照がある。同一友人との別れを惜しむ作らしい二番の歌にはこのような思いがもっと鮮明に表現されている。配列順からも内容からも、一番歌と密接しているこの二番の歌は次のとおり

その人、遠き所へ行くなりけり。秋の果つる日來てある、あか月に虫の声あはれなり

鳴きよはるまがきの虫もとめがたき秋の別れや悲しからん

友人は歳月が去っていくように、別れていかなければならない。このような現実の前で同じ弱い存在である自分には、どうにもできない。只ただ、それを遠く離れている所で悲しむばかりである、この気持ちに詞書きの「その人遠き所へいくなりけり」というだけでも、ひしひしと読者に伝わってくることは誰でも感じられることであらう。清水氏の言葉でいうと、「まるでその人を失つたかのように

に、前の歌の月を見失つたのと同じ響きがしている。友人——女の人生を悲しみながら冷静に見据えているのである。この姿勢がほかの未婚時代の贈答歌と見られる七番、九番、十一番歌にも見える。

七番 西へ行く月のたよりに玉草のかき絶えめやは雲の通ひ路

九番 あらし吹遠山里ののみち葉は露もとまらむことのかたさよ

十一番 霜氷閉ぢたるころの水くきはえもかきやらぬ心地のみして

このような式部は、今井源衛氏が『紫式部』（注8）のなかで、下向せねばならぬことで悩んでいる友人に、「返りごと」としての式部の歌を例にとつて、「一向に相手に同情を示さないで、むしろ感傷を捨てて冷静に物事を考えなさい」と説得する感が強い」、そして友人の絶えず訴えてくる別れのつらさに対して「式部は一貫して、冷淡と解されるのも無理ならぬほど、悪く言えばそつげなく情が薄く、良く言えば知的で冷静である。これは彼女の二十七歳という年齢とそれまでのいろいろの体験や深い教養によるものだ」と応言えるだろう。」と述べられているが、一方、清水氏が前掲の『紫式部』の中で、式部のこの返事は「単刀直入、余計なことを言わず月には毎夜西をさして廻つて行くものだから、お月様にことづけてでも、お便りをあげます。きつとお手紙を欠かさないと、慰めるのに精一杯と述べられている。

しかし、私には、この気持ちの限界は娘時代の詩作に一貫したものであり、内的自己意識——自己愛と自己存在感が現実と直接衝突していない否定されていない時だからである。実際的にも式部の現実の立場が違つていたようである。後藤先生の意見を一つの擁護として引かせて頂き、一つの例を挙げておく。つまり、

8 12において、二人の立場は全く別様だった。式部の側には、地方下りをする悲愴な覚悟も要らなかつたかわり、父の長い散官生活による沈淪意識、不如意感があつたことだろう」（注5b）。

三番 露しげき蓬が中の虫の音をおぼろけにてや人のたづねん

とは、明らかにこのような状態の違いを側面から表したと思う。十年ほど父親が閑散していることは、ちょうど少女時代から成人へと成長していく式部の内心にはどんな影響を及ぼしたのかについて、後で検討してみるが、とにかく、結婚前にはこのような立場の違い——自分の運命が結婚相手によって決められたという一徹しい現実が切実に迫つてきていない状況の中で、式部の精神世界に、女の人のかげりを感じていながらも、自分の未来に期待を抱いたと考えられよう。この現実の立場や人生に期待していることなど（大に伴つて下向することや悩む友人に対して、未婚の式部）からの距離感が、冷淡に見えるものとなつたのだと言えないであらうか。この序の心に映つたのは、△彼女たち△の幻の出現と消失であり、いかんともなしがたい「雲隠れ」「秋の別れ」「西へ行く月」「あらし」「霜氷」といった女友の抱えた現実で、女友の「思ひわづらふ」姿である。これらのことは式部の心に暗い影を落としたにちがいないが、結婚後の自己への反照反省や沈淪絶望は、少なくとも、この時期の歌にはなかつたことは事実である。

右に述べたところをまとめて言うと、未婚時代の同姓との関わりで、早くから式部の人生観の形成に悲観的な影響をもたらし、また

式部の現実への見通しができた基本ともなっていたと推論できよう。つまり、彼女たちが式部とどんな社会関係にあったにせよ、その時代を生きた女性であり、当時女としての様々な悩みや出来事を式部のところに持ってきた。彼女たちの人生が式部の心の中で反響され、沈殿し、発達した自己意識という主体性を通じて、現実への大きな認識がその精神世界にできたわけである。したがって、文学創作においても、個人的なものではなくて『源氏物語』という一つの人間社会を作り上げるほど、精神世界に広い幅を持っていたのである。言うまでもなく、ミクロ的に見ても、同性との関わりあいは創作素材としても大いに役立ったことは疑えないであろう。あれだけ大勢の、それぞれ個性を持った、中流階級にばかり属している女君の群像には、歴史人物の面影があったとしても、式部が周りの女性から材料やヒントを得た部分も少なくないと思う。そのリアリティがどんな天才でも、現実生活の中の人間をつぶさに観察しないととうてい想像だけでは、そこまで書けないものだろうと思われる。

ついであるが、読んだ本などでは、空蟬の間に源氏が闖入した出来事が詩集の四、五番歌とよく結ばれていき、それで式部は娘時代に恋愛を経験したとか、男性関係を持っていたとか言い、まるでこれぐらいに思わないと、式部が異性にもてなかったかのようだ。これが私にはどうも牽強附会に思われた。当時の住宅様式からして、男に顔など見られないように、女の人が努めても、覗かれるのは容易なことだったらしいし、垣間見られたとて、お互いに人袈裟になるまでもなかったと思う。まして、四番歌の口調を見ても、憚ることを知らぬ生娘が怪しい行動をした男を気がすむまで叩くというような調子であって、関係を持ったとはとても読めない。それどころか、前述したようにかえって、早くも女友の運命を通じて、現実の「人の世」を冷静に洞察していた結果として、その哀れさを知り、もともと物事を深く考える資質の式部のことと、又、固い儒学者の家系の育ちと、この年頃の娘に普通あるように、曖昧ながらも男性に対して、高い理想を持っただろうことなどを、合わせて考慮すると、式部は男女関係の深入りには慎重だったと推論した方が自然ではないか。それに、精神世界の面から言うと、最後まで平安女流作家の中で、恋歌が最も少ない式部の男女関係に対しての一貫した態度に高踏的なものがあつたと感じられてならない。それは彼女の高い見識と主体性から生まれたもので、彼女の持っているアイデンティティの必然的な表現であると同時に、若いときから見てきた友人たちの人生が自分の行動する時の良い参考となったのではないか。

一方、作家資質の式部の発達した自己意識は、結婚という立場の変化とそれに伴って降って来た不遇の人生に当たって、負の一面が現れてくる。娘時代と違って自分の内心や苦悩を誰かに理解してもらう立場になつてしまう。自分の本心と現実との間に埋め合わせることでできない「溝」ができ、人世に対する憂き意識はもはや一、三の外的な出来事ばかりに因るものではない。そして、「いづくとも身をやる方の知」れない、「世に経るになどかひめまのいけらじと思ひぞ沈むそこは知ら」ないという「すさまじき」心的危機は、決して個人の誰かが解決できることでもないのである。この場合、同性との関係に婚前と違う意味での「距離感」が出てくる、

はかなき物語などにつけて、うち語らふ人、おなじ心なるは、あはれに書きかはす、すこしけどほきたよりどもをたづねてもいひけるを、ただこれをさまさまにあへしらひ。そぞろごとにつれづれをばなくさめつつ

いかでかは、我が心のうちあるさまをも深うおしはからむと、ことわりにて、いとあいなければ、中絶ゆとなけれど、おのづから

かき絶ゆるもあまた。

というように『日記』に、同性とも「人の世の憂き」を分かち合い慰めあう関係さえ維持できなくなるとその心的な懸隔、孤独を訴えずにはいられなくなる。

さて、とかく悪評される式部の、自分と同じように文学意識に優れていると評価された同性への批判はどう見るべきか、この事象と式部の精神世界の深層との関係について考えてみたい。

現存の『紫式部日記』は決して長くない。にもかかわらず、前後して名前を明らかに挙げた女房の人数が69人にも達している（注5）。その内には親友の少将や宰相の君、或は富の内侍や式部のおもなどだが「心さまなどもめやすく、つゆばかりいづかたさまにもうしろめたいかたなく」、「ただ姫君ながらのもてなしにぞ、みなものしたまふ」と褒められているのに対して、齋院の方の中將の君の手紙をきっかけに、「まづわれさかしに、人をなきになし」とと猛反発し、中將がたのことは「齋院よりいできたる歌の、すぐれてよしと見ゆるもことにはべらず」と言ったり、清少納言のことなどを罵倒したり、歌才が公認された和泉式部のことも「ものおぼえて、うたのことわり、まことの歌よみさまにこそはべらざらめれ」と言ったり、自分よりずっと年長で当時女房歌人の大先輩格の赤染衛門まで批評せずにはいられない凄じい勢いである。特に、清少納言に対してまさに、今井氏のいわれたように「憚ることを知らぬ」にせよ、日記の最初から最後まで貫いた結論は「すぐれてをかしう、心おもく、かどゆゑも、よしも、うしろやすさも、みな具することとはかたし」という式部である。これがまた『源氏物語』「雨夜の品定め」の主旨にも徹底されていることは屢々指摘されているところなのである。では、何故、式部は繰り返しこれを強調せねばならないのか、この姿勢には何が隠されているのか。突き詰めて見ればこれは、式部の性格はどうかというより、やはり式部の内部の自己意識に由来するもので、同性に対して強烈な自負という形で無意識的に現れたにほかならないと、私は考えたい。

ユングの心理学理論によれば、意識的な考え方においては、人間は自分を合理的な表現内に制限するが、無意識は人間の本性をありありのままに表出しようとして働く。しかも、外的な要素によって、意識が影響され、このことを認知しているといかないにかかわらず、意識はほとんど防備なしでそれらに混乱させられたり、影響にさらされたりしている（注8）。式部は自分の学問や才覚、風雅の氣質は誰にも譲らぬ自負によって固められた一例えば、諸研究者が指摘されたように、天下を操るぐらい絶大な勢力を有した道長に、学才を買われて特別待遇を受け、中宮付きの女房となったというような「自己存在感が強ければ強いほど、あまりにも敏感に反応したあげく、ふだん穏やかに振る舞おうと心がけているのが乱れて、猛反発せずにはおかなくなったのであろう。これは又、自己愛と自己存在感が式部の精神世界においていかに重要なのかを裏づけている。自我の心的な基本部分が外的な要素に動揺されそう一人がそういう感じになる時になると、過激になるのも、人間の一般的な心理過程からすると、理解できないことでもないであろう。式部は天才的な素質の作家であると同時に、限られた環境の中に生きた生身の女性であることを忘れてはならない。このことが側面から『源氏

物語』は日記を書く時点で、すでに完成されたとの推論を可能にしたと思われる。式部の自負は自分の確実な成功に由来すると考えられるし、道長に買われた理由も式部に何か公認された実績があるにちがいない。それに、彼女自身も現実生活の中で、何かにつけて鋭い洞察力と冷静な思考能力によって、人より高い見識ができたと考えられる。

心にまかせつべきことをさへ、ただわがつかふ人の目にはばかり、心につつま。まして、人のなかにまじりては、いはまほしきこともはべれど、いでやと思ほえ、心得まじき人には、いひてやくなかるべし、物もどきうちし、われはと思へる人の前にては、うるさければ、ものいふことももの憂くはべる（中略）、御屏風の上に書きたることをだに読まぬ顔をしはべりしを、宮の、御前にて、文集のところどころ読ませたまひばどして、さるさまのことしそめさまほしげにおほいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬもののひまひまに、をととのの夏ごろより、楽府といふ書、巻をぞ、しどけながら教へたてきこそさせてはばる、書くしはべり。

このように、鋒鋇を隠さなければならぬという意識と、自己の存在価値の確認願望がたえず働いているため、常にその矛盾に苛まれる式部の精神世界の真相は、同性との関わりを通じて、少し見えてきたかと思う。

いうまでもなく、この事態に感性的ながらも敏感に気がついたのはほかではなく式部本人である。人生の価値観、世界観のところてい、こんなにも「水」と「火」のような相容れない狭間に陥ると、日常生活において悩み苦しむことは勿論、時には心が偽りと真実とによって引き裂かれてしまい、その人生全部を滅ぼすことも古今問わず、枚挙に暇ない。「心」と「身」とを繰り返す歌に詠み、「罪深い」と人生の反省観照に口々を送った式部の、その高い教養と知性及び先天的な素質などの条件によって発達した精神世界に、異性との関わりあいがあるように組み込まれていたのか、その都度の式部の取捨選択に彼女の精神構造がどんな様相を呈しているのかを、次章で検討してみたい。

参考文献

1. 『国文学 紫式部―源氏物語への回路』昭和57年10月号 学燈社
 - a. 「生と世」藤井貞和
 - b. 「執筆との関係」高橋和夫
 - c. 「複式構造の意味するもの」菊田茂男
 - d. 「源氏物語作者の表現意識」秋山虔 渡辺実
 - e. 「紫式部全歌評釈」
2. 『源氏物語の原点』伊藤博 明治書院 昭和55年
3. 『芸術と創造的無意識』エーリッヒ・ノイマン著 氏原寛 野村美紀子訳 創元社 昭和62年
4. 『孤独』アンソニー・ストー著 森省 吉野要訳 創元社 1994年
5. 『平安文学論究 第六輯』風間書房 平安文学論研究会編 平成元年
 - a. 「紫式部日記論」日向一雅
 - b. 「紫式部集冒頭歌群の配列」後藤祥子
 - c. 「紫式部日記にみえる女房論の諸相」森本元子
6. 『紫式部』清水好子 岩波書店 1980年
7. 『人物叢書 紫式部』今井源衛 吉川弘文館 昭和62年
8. 『人間と象徴』C・G・ユング著 河合隼雄訳 河出書房新社